Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-04-29

谷崎潤一郎の『卍(マンジ)』における文体的特徴について(二)：「大阪語」の中のオノマトペと外来語

湯淺，英男

(Citation)
近代,96:37-80

(Issue Date)
2006-02

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001742

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001742

谷崎潤一郎の『卍（まんじ）』における文体的特徴について（二）

――「大阪語」の中のオノマトペと外来語――

湯浅英男

三　オノマトペ

本稿の前編にあたる（一）においては、関東大震災直後関西に移住し作家活動を続けた谷崎潤一郎を、関東からの「越境者」として捉え、関西出身の女性を語り手とした移住当初の小説『卍（まんじ）』を、大阪弁（あるいは阪神間に居宅を構えているため関西弁と言ったほうがよいかもしれない）を中心に分析した。本編の（二）においては、『卍（まんじ）』に現われる擬音語・擬態語と外来語を中心にその特徴を見てみたい。(12)

日本語の擬音語・擬態語の歴史的変遷を概説した山口（二〇〇二）は、現代の大阪の代表的小説家田辺聖子の小説『男はころり女はごろり』の一節を取り上げ、擬音語・擬態語を拾っている。男の手触りについて述べた箇所だが、山口の引用箇所（同上、二五頁）の冒頭部分を少し省略して紹介しておく。

片や、女、赤ちゃん、びろうど、猫が、フワフワ、しっとり、スベスベ、だとすると、片や男というものは「老いたる若きもろともに」ゴツゴツ、ザラザラ、ギシギシ、カサカサである。無精ヒゲでも生えてればゾリゾリと卸し金かヤスリの如きもの、たまに、ツルツルだったとすると禿あたまだったりして、どこをさわっても「いい感じ」というのがない。

山口は日本人であれば擬音語・擬態語を抜き出すのは簡単だろうとして、触感を表わす擬態語「フワフワ」「しっとり」「すべすべ」「ゴツゴツ」「ザラザラ」「ギシギシ」「カサカサ」「ツルツル」を、またヒゲをこすった際の音を写す「ゾリゾリ」を挙げているが、このこと自体異論はなかろう。さらに、容易に擬音語・擬態語を指摘できる理由として、擬音語らしさ、擬態語らしさを感じさせる語形の存在を挙げ、「「ＡＢＡＢ」型の擬音語・擬態語が、日本語では数量がもっとも多く、擬音語・擬態語の代表選手」であるということを、自らの歴史的な文献調査も背景に述べている（以上、山口　二〇〇二、二六頁。以下、本稿での語形の表記は山口（二〇〇二）に従う）。ただ本節は、日本語における擬音語・擬態語の使用実態の調査・分析を行なうものではなく、谷崎の関西弁の語りを中心に展開される小説『卍（まんじ）』の文体を、擬音語・擬態語といった側面から若干の考察を行なおうとするものである。その点で、山口が大阪の女性作家田辺聖子から擬音語・擬態語の例を多く抜き出したことは、（たとえ作家個人の好みの問題はあるにせよ）大阪の女性の語り口調には比較的多くこうしたオノマトペ（以下、擬音語・擬態語の類を適宜簡略化してこう呼ぶ）が使われるのではないかと推測される。そこで実際に谷崎が、語り手柿内園子をはじめ、登場する関西の女性たちに、どのようなオノマトペを使わせているのかを具体的に見てみたい。

三・一　反復形のオノマトペ

日本語のオノマトペには、山口も指摘するように歴史的に見ても「ガタガタ」「ヒラヒラ」といった［ＡＢＡＢ］型、いわば反復形のオノマトペが突出して多い。また単にオノマトペに留まらず、本来言葉一般の形成手段として反復は最も素朴な方法と言えるかもしれない（金田一　一九七八、二三頁以下、泉　一九九〇、一二八頁以下等参照）。オノマトペの音韻論的形態についての分類に関しては田守（一九九三ａ）、田守・スコウラップ（一九九九）等の詳しい研究があるが、本稿ではそうした詳細な分類に従うことはせず、あくまで谷崎の作品の中でのオノマトペの使われ方の全体像の把握にとどめたい。その際、先の田辺の小説のオノマトペもそうであったが、山口（二〇〇二、三四・三五頁）のオノマトペの「語型の変遷図」を見ても、［ＡＢＡＢ］型の反復形は、すでに奈良時代・平安時代から使われており、あとで紹介する促音「ッ」の生起するタイプが鎌倉・室町時代にならないと使われないのと比べて、格段に古い語形と言える。当然奈良時代・平安時代の古典と呼ばれる作品は関西圏の言語慣用に則ったものであり、反復形のオノマトペ自体、関西弁の源に位置する言語形式と見做せるものであろう。

オノマトペは、基本的に動作や出来事を修飾する副詞あるいは副詞的表現として用いられると考えてよい（田守　一九九三ｂ、一八頁）。例えばそれは「ピカピカ」だけで「輝く」や「光る」が連想され、また「ヒラヒラ」だけで「落ちる」や「舞う」という動詞が思い浮かぶことを考えても、その副詞としての機能の高さがわかる（田守　二〇〇二、九頁以下参照）。ここでは『卍（まんじ）』の反復形のオノマトペについて、主にどのような動作・出来事を修飾しているかを基に、概略分類して提示することにしたい（以下分類は、提示してある例文に基づく）。また文法的には、動作・出来事がどのような仕方・様態で起っているかを描写する「様態副詞」として用いられている場合が最

も多いが、場合によっては動作の結果の状態を表わす「結果副詞」や（反復形の場合、格助詞の「に」が接続する）、「程度副詞」「頻度副詞」などとして用いられる場合もあり（田守　一九九三b、二〇〇二参照）、それらについては例文の終わりに付記しておいた（同系列のオノマトペに関しては、初出のものに限った）。またそれに加えて、田守（一九九三b、二〇〇二）などでは、オノマトペの中には入っていないが、否定・推量など述語の陳述的意味を補足・明確化する陳述副詞の用法も付記しておく（「陳述副詞」については、例えば工藤（二〇〇〇）等参照）。また声や音を模写した「擬声語」「擬音語」（本稿では前者を後者に含める形で記述しているが）と、声・音が出ておらず、動作・出来事の様子・様態を象徴的に表現した「擬態語」とは、その造語上の発生的契機が異なるが、文法的振る舞いの類似性から特に区別せず列挙した（以下、例文の下の数字は当該のオノマトペが出てきた新潮文庫版『卍（まんじ）』の頁数、算用数字はその頁で生起した回数を示す。算用数字がない場合は一回の出現。また平仮名表記の語と片仮名表記の語、あるいは繰り返しの回数の異なる語は別単語扱いとした）。

（笑い方）

・あはあは笑うたりなんぞして（九）

・クスクス忍び笑いするのんです（一〇、一〇二［2］、一五六）

・光子さんはくつくつ笑われて（二六、三七）

・ニヤニヤ笑てなさるのんです（二四、一二四、一四六、一六〇）

・ニコニコ笑いなさるのんです（八六、一六四）

・青オイ顔ににたにた笑い浮べながら（二〇〇）

（話し方・言い方等）

・ぼつぼつそんなこと話しかけました（三五、七六、八七）
・ぶんぶん当り散らしました（五〇）
・ぽんぽん云わんと（五一）
・ぐずぐず云うたら（五七、一四七）
・何ぞこそこそ相談するらしいて（六二、六六、七三）
・何やひそひそ眼ェで物言うて（七六）
・ヒソヒソしゃべってるのんが（一八五）
・そないくどくど云わいでもええ（一四二）
・べちゃべちゃしゃべってるのんや（一六三）
・一遍にすらすら云うのんと違て（一六七）

（見る様態）

・顔しげしげと見守ること出来しませなんだ（一五）
・私の顔モジモジと孔の開くほど視つめてますねん（一一〇、一六五）
・ジロジロ邪推深そうに人の顔色うかごうたりして（一一二、一一五、一五六、一六二、一九五、一九七）
・キョロキョロ見廻したりし出した云うこと（一八四）

（人の移動の仕方）

・こそこそ逃げるように傍通り抜けましたが（一五）

・コソコソ逃げてしもて（一三〇）

・直ぐつかつかと寄って来られて（一七）

・若草山の方ぶらぶら歩き廻りました（一二三）

・我先にバラバラ逃げ出して（七一、九八）

・刑事がどやどや踏み込んで来たのんで（七〇）

・ちょいちょい見えました（八二、九八、一一一、一一七、一四六）（頻度副詞的）

・女子衆がバタバタ走って来て（八五）

・おめおめ引っ着いて行ったぐらい（一〇一、二〇六）

（物の移動の仕方）

・蜜柑は頂辺から下までころころと転んで（二三）

・汗がたらたら流れるぐらいの暑さでした（三二）

・体じゅうビリビリ伝わるような気イしました（八三）

・しとしとしとしとと……今夜は五月雨が降っている（四〇）

・しとしとしとしと……（四〇）

・しとしとしと……（四〇）
・車はどんどん走っていきました（七五、一五七）（程度副詞的）
・涙がポトポト頬べた伝てるのんです（一二七）
・ポツリポツリ耳に這入ったのんが（一八六）（これは［ＡＢリ］型の反復形）

（人の動作・行為等の仕方）
・スプリングぐいぐい撓ましたりしながら（三一、九二）
・髪ばらばらにして（三二）（結果副詞的）
・シーツを口でずたずたに引き裂きました（三四、七三）（結果副詞的）
・ぶるぶる顫いながら（三四、八一、一八四）
・イヤにねちねち追求して（五三）
・涙をぼろぼろこぼして（五七）
・ついぐずぐずに会うてなさった（一三三）
・ペコペコお辞儀するのん（七二）
・すやすや寝てるらしいのんです（七八）
・はあはあ苦しい息吐きながら（七八［2］、七九、九〇、一五七）
・ハンカチをぐるぐる指に捲きつけながら（八六）
・ペタペタおしてしまいましてん（一二五）

・かんかんになって怒ってる（一五〇）（結果副詞的）
・ずくずくに汗かいて（一五七）（結果副詞的）
・コツコツとドーアをノックして（一六四）
・そいからそろそろ注文持ち出して（一七四、一九六）
・ポロポロ涙こぼしなさるのんで（一八五）
・しくしくしくしく泣いてばっかりいる私を（一八九、一九一）
・突然はらはらと涙を流した（二〇六）
・大事な時間滅茶々々にしられておしまいになって（五）（結果副詞的）

（出来事の起り方）
・シーツがびりびり破れました（三四）
・膝頭までガタガタふるえが来ました（六一）
・ジリジリ腹立って来て（七三）
・激しい動悸が、（中略）どきんどきん云う音立てて（七八、八六）（これは［ＡＢン］型の反復形）
・チョイチョイかかって来ますさかい（一七五）（頻度副詞的）
・門のベルがジイジイ鳴って（八五）
・草がぼうぼう伸びてる蔭に（九七）
・スルスルと鋭利な感覚がした思たら（一二五）

・涙でそこがびしょびしょに濡れるぐらい（一四八）（結果副詞的）
・ねちねち絡み着いて来ますのんで（一六三）
・パタパタと庭下駄の音して（一八四）
・ムカムカ吐き気するような感覚が（一八四）
・バタバタと片附いてしもたのんで（一九二）

（状態の有り様）
・豚小屋みたいに汚うてぼろぼろになったなり（一九）（結果副詞的）
・ぽたぽたとにじんでいる（一二二）
・ごちゃごちゃに幻影みたいに眼エに映ってて（一八四）

右の分類においては、便宜的に「笑う」「言う」「見る」「動く」といった動作の仕方は独立させ、項目を立てている。よって、「人の動作・行為等の仕方」においては、そうした動作を除いて分類した。加えてここには、人間の心理的な動きや「涙を流す」のような、人の無意識的現象も入れている。同様に、「物の移動」についても、「出来事」からは除いて分類している。また否定辞と共起する、陳述副詞的とした「なかなか」については、形式的にはオノマトペと見做しうるが、意味的にオノマトペと考えてよいかは、なお検討が必要であろう。以下の本稿の記述で、陳述副詞的としたものについては、同様の課題が残る。

またオノマトペの具体例について言えば、谷崎の『卍（まんじ）』そのものは現代からおよそ八十年前の大阪弁で

もって語られている。よって、例えば笑い方の「くつくつ」などは、おそらく現代の大阪弁・関西弁では用いられないであろう。だが『卍（まんじ）』の中の多くの反復形のオノマトペについては、特に大阪弁と言わず、現代の標準語において一般に用いられるものが多い。そしてこうしたオノマトペの使用自体が、たとえ関西の女性の語りという小説の特性に起因するものとしても、語られる情景の描写をより生き生きとしたものにしている可能性がある。極めて正当な大阪弁が使われてはいるが、得てして欠けがちな大阪弁の持つリズム感・ダイナミックな動き（前稿の（一）の二・三参照）を、オノマトペの持つ「ヴィヴィッドな描写力」（田守　二〇〇二）が補っていると言えなくもない。

ここで少しオノマトペが使用される意味領域に触れれば、例えば大坪（一九八九、一九八頁）は、谷崎の『痴人の愛』に現われるオノマトペと、宮沢賢治の十一編の児童文学作品（新潮文庫版『風の又三郎』所収）のオノマトペを比較して、「谷崎潤一郎では、人に関するものが圧倒的に多いが、宮沢賢治では、人に関するものよりも、むしろ、自然・植物・動物に関するものが多い」と述べている。作品は異なるが、大坪の分析によって谷崎のオノマトペの使い方の傾向は多少とも分かる。そこでは宮沢賢治の場合、上記作品のオノマトペの総数が一一〇一回に対し、谷崎は六五四回、またその内、人の音声・表情・行動などの領域で使われた割合が、賢治の場合は三二・九パーセントに対し、谷崎では七六・三パーセントとなっている。この使用意味領域に関する違いは、大坪（同上）も認めるように、基本的には「人間世界」を対象とする小説と、「自然・植物・動物などの世界」を主として描く児童文学という、ジャンル差に起因すると言える。だが上記で紹介した『卍（まんじ）』における最も典型的な［ＡＢＡＢ］型のオノマトペにおいても、そうした使用対象に関わる傾向は見て取れる。谷崎が人の動作・表情にオノマトペを最もよく使用しているという事実は、確認しておいてもよいであろう。[13]

またオノマトペの中には、「ゆっくり」や「こっそり」のように、すでに特定の動作との結びつきを想像できない

一般的な副詞に近いものもある（田守　二〇〇二、三五頁以下参照）。文法的に言えば、「語彙化」の程度が進んだということになろう（筧　二〇〇一参照）。この語彙化が進めば進むほど、オノマトペと本来の副詞とを区別することが難しくなるが、辞書などで副詞として分類されている語に、オノマトペと同じ形態上の特徴を持つものが存在しており、このことが一層オノマトペと副詞の境界をあいまいにしている。[14] 谷崎の『卍（まんじ）』の中にも、以下のような繰り返しを伴う副詞が存在する（例の内、三つ目の「だんだんに」は助詞の「に」が義務的と見做せるため、二つ目の「だんだん」とは別単語の扱いにしておいた）。

・うすうす気イついてたかも　（六、一四、二九、一五三）
・そのうちにだんだん（中略）はっきり分かって来まして（六、二五、四六、五七、五八、五九、六九、七〇、七八、九三、一〇〇、一〇三、一〇六、一一八、一一九、一二六、一二九、一三八、一三九、一五八、一六八、一八六、一九四、一九七、二〇一）
・だんだんに解いて行きましたが（三五）
・あんたもなかなか隅に置けんなあ（一一六、五三、七八、一二〇、一五二、一五三、一五五、一八〇、一九五）（陳述副詞的）
・とうとう口に出して（三三、四四、一三八、一九一）
・めいめい何や別なこと考えてる（三七）
・いよいよ邪魔しられたのんが腹立たしいて（三七、二〇二、二〇五）
・わざわざ電話かけたん？（五九、一三六、一五〇、一六五、一六七、一八二、一九三）

・ようよう納得さしましてんと（一三七）
・もうもう今日は何もかも云うてしもてんし（一四八）
・しぶしぶ連れられて出て来ましたら（一五七）
・ますます邪魔するさかい（一六五、一九九）
・夜もおちおち寝られへんのんです（一六五）

ここで繰り返しを伴うオノマトペの議論に戻れば、単純な［ＡＢＡＢ］型ではなく、二回目の語句の語頭が濁音化する［ＡＢ′ＡＢ］型もある。

・自分でもしみじみ考えまして（五）
・つくづく綺麗やなあと感じたことあれへんか？（五四、一六六、二〇一）
・さめざめ涙流すのんです（九二、一二八）

またこれに類する副詞には、以下のようなものが考えられる。

・かねがね覚悟していたことが（四四）
・うちもさんざん心配さされて（九九、一七六）
・とうどう泣き寝入りになってしまいましてんて（一四七）

また、繰り返しの語句の語頭が変化するいわば［ＡＢ（リ）ＤＢ（リ）］型もある。

・つべこべつべこべ果てしないのんです（一三四）

・ぬらりくらりした字体で（四〇）

以上列挙したような反復形のオノマトペ（さらには反復形の副詞も含めてよいかもしれないが）は、『卍（まんじ）』にかなり多く使われていると言える。だがこのことが、先の田辺聖子の小説で多用されていたことを一つの根拠として、関西女性の語り（あるいはより一般的に言えば言語行為）にこの種のオノマトペが頻出すると言えるかどうかは、もう少し実証的な検証を待たねばならない。ただこうした表現は、関西女性が「連続した繰り返しの音や動作」（田守　二〇〇二、七九頁）を認知・表現する際の「好まれる言い廻し」（fashions of speaking）（Ｂ・Ｌ・ウォーフ、池上訳　一九七八参照）の一つであることは事実であろう。

三・二　促音を含むオノマトペ

オノマトペの典型的な音韻形態として、反復形のほかに促音を含むものが存在する（田守　一九九三ａ、田守・スコウラップ　一九九九参照）。谷崎の『卍（まんじ）』の中で促音を含むオノマトペで目に付くのが、［Ａ（Ｂ）ッ］型、及びＡの母音部分が長音化された［Ａ―ッ］型である。そして、Ａ及び「ッ」の表記に関して谷崎は、平仮名・片仮名、さらにはそれらの混合形と様々である。さらに長音部分についても記号の「―」のみならず、前のモーラの

音の母音部分を平仮名表記したものや「う」で表記したものもある。またこのタイプでは［A（B）ッ］あるいは「A―ッ」のあとの格助詞「と」は必須となっているが、さらに助詞が続くケースもある。できるだけそうした隣接助詞の多様性を紹介するため、それぞれの形を別形として挙げておいた。以下が、そうした促音を含むオノマトペの例である。便宜的に、反復形のオノマトペ同様、各例文で使用される述語の意味論的タイプに即し、オノマトペの例文を分類しておく。

（笑い方）

・くすッとけったいな笑いようをしたと思たら（八七）

（泣き方）

・わッと泣きながら（一七二）

（見る様態）

・私の顔じいッと視つめなさるのんです（一二、五四、七二、一八〇）

・私の顔じーッと視つめたまま（三四）

・ジーッと見つめては（七六）

・じーっと光子さんの顔視詰めてますと（一九五）

・じっと睨んでおられるだけで（一三、三三、五七、八七、一〇七、一二六、一三八、一四八、一六八、一七四、一

七五、二〇一）

・じッと手もと視詰めてて（一九六）

・そうッと顔色うかごうたりしました（一五、七一、七七、一二六、一五一、一五七、一七九、一八九）

（人の移動の仕方）

・すうッと通ってしまいはりますが（一七［2］、一三〇）

（物の移動の仕方）

・なんやシューッと白い物飛んで（五五）

・カチッとうしろの壁い当たりました（五五）

（人の動作・行為等の仕方）

・ひょっと書き出して見ましたのんですが（五）

・そッと玄関まで出さしましたが（六二）

・そうっと薬飲んだらしい（一〇〇）

・そんな事とはちょっとも知りませなんだが（二〇、二一、四五、四八、四九、五二、五三、六四、六五、七四、八七、九二、九三、一〇四、一〇八、一〇九、一一三、一一六、一二九、一三五、一三六、一三八、一四四、一五三、一五五、一六九、一七三、一七九、一八九、一九〇、一九四［2］、一九九）　（程度副詞的）

・お母さんちょっとまごつきはってなあ（二五、三一、五六、六〇、六二、七四、七七、八二、八五［3］、九四［2］、九七、一〇八［3］、一一三、一二三、一二八、一三七、一四、一四七、一五二、一五六、一五七、一六七、一七六、一八三、一八四、二〇二）
・もうちょっとで死ぬ云うとこへ（一七六）
・自分でちっとも済まないことをしたと云う気が起らないの（四四、四九）
・一週間ほどずうッと一日も欠かさんと（五〇、六一）
・もっと先生に聞いて戴きたい事があるのんです（四五、八一、八一）（程度副詞的）
・かあッと逆上してしもて（三四）
・こそッと人の居ん所い閉じ籠ったりするようなんは（五二）
・夫がむくッとすわり直した思たら（五五）
・かっと興奮してしもて（五五）
・ぺたッと畳い頭擦りつけて（六八、七二）
・むうッと向かい合うたなり（七五）
・夫の腕でぎゅうッと抱きしめられました（七九）
・ぎゅッと頸のまわりに抱きついて（八一、九一、九二）
・ほっと重荷イおろします（八一、一五七、二〇三）
・ふっと思いついた云うのんは（一七五）

（出来事の起り方）

・何やしらんはっと胸いこたえるもんありまして（一〇）

・こいでようよう胸すッとしました（二一）

・直ぐに心臓どきッと早鐘打つようになってましたのんに（三六）

・ちらッと枕屏風が見えただけでしたけど（六八、七三）

・襖がごそッ云うて（七三）（「と」の削除は大阪弁の文法的特徴、本稿（一）参照）

・はっと襲われたみたいに（八一、一九五）

・すうッと表から吹き込んで来る風と一緒に（八五）

・ぱっと世間に知れ渡るようにして（一一七、一三九）

（状態の有り様）

・ぞうッと身の毛のよだつようなことありますのんで（二〇〇）

・ちょっとでも顔綺麗かったら（二五、四八、八〇、八一、一五五、一九七）

・体のつきがちょっとだけ違うよってなあ（三〇）

・ちょびッとよりないやろ思てますさかい（一三六）

・ずうっと数珠のようにつながって（二七）

・もっともっとええとこい行けるやないか（三二）（反復は強調のため）

・気持ちがぴちっと合うのんでのうて（四六）

・姿と性質のぴちッと合うた人（五五）
・姿がすらッとしてなさるのんで（四九）
・ざっと一時間（一八二）

（呼びかけ）
・ちょっと、ちょっと（一一九）（反復は強調のため）
・ちょっとこれ見て下さいませ（一二〇）

右の例の内、副詞的に用いられている「ちょっと」の系列は、程度副詞として少量を意味するオノマトペであろうが、現代ではかなりオノマトペとしての意識は希薄になっている（角岡　一九九三、一五三頁参照）。さらに呼びかけに使う「ちょっと」はすでに間投詞的機能の方が強く、オノマトペとしての意識は一層薄い。

ここで少し注目してよいのは、歴史的に見ると促音を含むオノマトペが出現し始めたのが、鎌倉・室町時代からであるという山口（二〇〇二、三三頁以下参照）の指摘である。当然その時代に関西圏で文化的活動が行なわれなかったというわけではないであろうが、むしろ政治的活動拠点の東への移動と共に、文化的活動も東へ移動したと推測され、そのことは、促音のオノマトペについて一つの解釈を生むことになる。元来東京弁では、母音よりも子音を丹念に発音し、そのため促音も多いと見做されているが（前田　一九四九、一四頁以下、前田　一九六一、四五頁以下参照）、このことも促音を含むオノマトペが鎌倉・室町時代以降に出現したことと関係しているかもしれない。仮に長音を含む［A（B）ッ］型が大阪弁的語彙とは言えても（つまり前掲の前田（一九四九、一九六一）によれば、母

音を子音よりも丹念に発音し、母音を長音化するのは大阪弁の特徴であるため)、[A(B)ッ]型のオノマトペは、歴史的出自からしてかなり東京弁的オノマトペであると言える。例えば、『卍(まんじ)』の中で「見る様態」に関するオノマトペ「じっと」は、長母音を含む「じーっと」タイプと比較してもかなりの頻度で使われている。この点に関し、谷崎の使う大阪弁に多少東京弁のニュアンスを感じることもできよう。

また副詞との境界のあいまい性に関して言えば、以下のものは上記の[A(B)ッ]型のオノマトペと同型の副詞と言えるが、これらもオノマトペ起源の可能性がある。

・きっと来て!(四一、六四、一三七、一四二、一五一、一五五、一五七、一七九、一八二、一八五)
・きっときっと手ェ切れるようにしたげる(一五一、一五二)(反復は強調のため)
・やっと起き上がって(八五、一五二)

山口(二〇〇二、三四・三五頁)のオノマトペの歴史的変遷図によれば、「ぺろり」のような「り」で終わる[ABり]型は平安時代にその出現を見て取れるが、促音が挿入される[AッBり]型については、やはり鎌倉・室町時代の発生としている。「り」で終わるこれらのタイプについては共に現代まで生き続けているが(山口、同上)、促音を含む後者のオノマトペについては、谷崎の『卍(まんじ)』でも散見される。またこのタイプのオノマトペにおいて、助詞の「と」の付加については一般に随意的とされる(田守・スコウラップ 一九九九、六六頁)。以下がそうした例である。

（人の動作・行為等の仕方）

・あんなりぷっつり絶交してしまいました（六）
・ぷッつり遊び止めてしもて（一三二、二〇四）
・お午の休みに休憩所でばったり出遭うと（一七）
・ゆっくり聞いてもらいますが（一八、六〇、一八〇）
・そないきっちりと真面目くさってばっかりもいられへんもん（五三）
・ばったり顔見合わしたら（八一）
・ひょっこりあの人が訪ねてきたら（八二）
・びっしょり汗掻きながら（九七）
・ニッコリ笑いなさったのんで（一一八）
・コッソリ光子さんに見られてしもてて（一二六）
・綺麗さっぱりと切れる云う訳に行けしませんのに（八二）
・海水服の上からスッポリ被れるようなワンピースの洋服にして（一八一）

（出来事の起り方）

・はっきり分って来まして（六、五三、六〇、六四、一四五）

（状態の有り様）

・封筒の絵とぴったり合っている（四〇）
・ちょっともハッキリせえへんのんで（一二九、一六二、一七〇、一八四、一八八）

ただこのタイプのオノマトペで程度副詞として用いられるものについては、「と」を伴わないのが普通とされているが、例外も見られるようである（例えば、「めっきりと」等。田守・スコウラップ　一九九九、六八頁以下参照）。『卍（まんじ）』の中の例では、以下のものに「と」が付加しにくいと考えられる。ただ現実の状況を具体的に写したものではないだけに、オノマトペか通常の副詞かの区別は一層むずかしい。

・あんたにすっくりお話すること出来て（二一［2］、二八、一四〇、一六九、一八三、一九三）
・さっぱりそんな気持ちになりませなんだ（四六、六二、六四、一二九）（陳述副詞的）
・ちょっきり約束の時間に行ってましたら（九六）
・カラクリの種こっきり僕に握られてしもてて（一九三）

副詞との区別のつきにくさは、以下のオノマトペ形式をとる副詞を見ると、より明らかであろう。

・やっぱりあたし気が弱いのかしらん？（四〇、四五、四八、六〇、一三二、一三三、一三五、一五〇、一七九、一八三、一八五、一九五、一九七、二〇二、二〇四）
・その時うっかり光子さんが（中略）云うてしもたのんで（五〇、九〇、一二六、一八二）

・シッカリ手ェ握ってて（一二四）
・しっかりした人や思て（一三〇）（動詞化）

なお促音を含むオノマトペには［AッA］型もあり、以下のようなものが『卍（まんじ）』には見られる。「と」は義務的に付加される。

・せっせと働きました（八〇）
・さっさと追い出してしもてェな（五九、一八九）

これらも促音を含むため山口（二〇〇二）によれば、やはり鎌倉・室町時代にその源がある。

三・三　撥音を含むオノマトペ

オノマトペに撥音が多く使われることは、よく知られた事実である（田守　一九九三a、山口　二〇〇二等参照）。すでに紹介した反復形のオノマトペの中でも、「ぷんぷん」「ぽんぽん」「かんかん」などは撥音の「ん」を含んでいる。撥音を含む［Aン］［AンAン］［ABン］の型については、山口（二〇〇二、三六頁）によれば平安時代に発生したと考えられる。ただ表記に異同があって、例えば「ちう」「こうこう」「ちりう」などと表記されていたとしても、現実には「う」が現在の「ん」に近い発音がなされていた可能性が高いと見られる（同上）。元々大阪弁・関西弁には「ん」が多用されているため（本稿（一）参照）、この種のオノマトペは極めて大阪弁らしい―つまり関西起源と

いう仮説も成り立つような音韻上の特徴を有していることになる。また大阪弁が好む長音が挿入されている型も多く、反復形を除く形でまとめれば、［A（B）（ー）ン］型となろう。またこの場合、助詞の「と」の付加は義務的となる。以下が、『卍（まんじ）』に現われるその種のオノマトペの例である。

（人の動作・行為等の仕方）

・蕨やら、ぜんまいやら、土筆やら、たあんと採りました（二四、七六、八四、一九六）

・もうちゃんと涙ぐみながら（九六、一一一、一二三、一二九、一三三、一四五、一四七、一六九、一七九、一八二、一八三、一九七、二〇三）

・キチンと洋服の膝がしら揃えてすわって（一五六）

・ドーアぱたんと締めて（一五七）

（出来事の起り方）

・すると蜜柑は（中略）、その拍子にぽんと一つ往来飛び越えて（一二三、一三〇）

・じきにどかんと深うになってますので（三一）

・てんと話はずまずに（三七）

・しーんと静まり返ってしもてて（七三）

（状態の有り様）

・お金はたんとありまっさかい（一九、二四、四六、二〇二）
・たんとたんとありますけど（三八）（反復は強調のため）
・もうちゃあんと、あなたと私のこと向い知れてしもてるねん（二四、二八）
・とんと綿貫生き写しになってるやあれしませんか（二〇一）

以上の例を見てもわかるように、任意に出現する長音に関しては、三・二で述べた促音を含むオノマトペ同様、記号「ー」のほか、前のモーラを構成する「子音＋母音」の母音部分の字母を平仮名で表記する形も使っている。谷崎におけるオノマトペの表記法は、比較的自由である。

三・四　「り」で終わるオノマトペ

オノマトペにはすでに平安時代から「り」で終わる形（例えば、「ぺろり」等）が使われていたが（山口　二〇〇二参照）、『卍（まんじ）』でも、以下のような［AンBリ］型、［ABリ］型が見られる。「と」の付加に関しては、前者は随意的であるが、後者は義務的である。

・ぼんやり気イつき出して来たよって（四八、一八四、一八八、一九九）
・夫がぐるりと向き直って（五六）
・冷こいもんがポタリと顔に落ちましたので（九八）
・チクリと痛いとこ刺されたのんで（一四六）

この種の「り」で終わるオノマトペは、「〜（と）する」タイプの動詞化した形（後述）でもよく用いられる。

三・五　オノマトペを用いた副詞以外の品詞の形成

オノマトペはすでに述べたように、本来動詞を修飾する副詞的機能を持つ。だが同時に副詞以外の品詞を形成することも可能で、このことが日本語体系におけるオノマトペの影響力を強めている（副詞以外の品詞形成については、田守・スコウラップ　一九九九、五五頁以下も参照）。

三・五・一　オノマトペから作る動詞

『卍（まんじ）』の中では、オノマトペが動詞化した例が多いが、以下そうした例をオノマトペ及びそれと接合する動詞を基準に分類して示す。まずオノマトペに「する」が付加するタイプを挙げるが、オノマトペと「する」の間に義務的に「と」が挿入されるタイプから始める。

動詞型「［A（B）（｜）ッ］とする」

- わたし思わずはっとしまして（一〇、九八、一六八）
- 自分の美しさにぼうっとしておられるのんでした（三三）
- 思てもぞっとする（四三、一五三）
- むかッとしました（五四）

・うかッとした者頼む訳に行きませんし（六一）
・ほんまにほっとして（九一、一六四）
・ひょッとしたら（一一九、一六九、一八二、一九〇、二〇六）
・ぞうッとして脳貧血起しそうになりましたが（一二五）
・ぎょッとした顔して（一四五、一五五、一六四）

「と」の付くタイプには右に見たように［A（B）（―）ッ］型のオノマトペが用いられることが多いが、それ以外のオノマトペの例も少数ながらある。

動詞型「［A（B）ン］とする」
・キチンとしてましたのんは（六八）
・ちゃんとした人ありながら（一一八）
動詞型「［AッA］とする」
・せっせとしてるもんあれへんわ（五三）
動詞型「［ABリ］とする」
・ビクリとして飛び上がるような恰好しましてんけど（一七二）

次に示すものは、「と」が付加されないことが必須ないしは一般的な動詞のタイプである。ここで使われるオノマ

トペは、反復形のものが一番多い。

動詞型「［ＡＢＡＢ］する」

・始終そわそわして　（六、二二、六五）
・暫くもじもじしてました（二一、五三、六七）
・奈良の町の灯イちらちらして（二七、六七）
・派手な模様がチラチラして（八六）
・キラキラするお天気でしたから（三二）
・胸がわくわくして（六一、九五、一一八）
・キョロキョロしてますよって（六三）
・ウロウロしてますのんを（六三、七一、二〇四）
・ぐずぐずしてるのんを（六三、七五、八七、一六八、一八三、一八四）
・グズグズしてたら（二〇四）
・頭が破れるようにがんがんして（七八）
・どきどきする胸おさえながら（八一）
・うろうろしてますと（八五）
・イヤイヤしなさって（九一）
・ひとりでジリジリしてますと（九六）

・女の腐ったんみたいにねちねちしてて（一一二）
・コセコセした字を書く癖があるのであろう（一二三）
・何処ぞオドオドした様子出るのんか（一二五）
・ムカムカするような気イして（一三七、一九七）
・にちゃにちゃした口調で云いますのんで（一三八）
・ビクビクしてたのんですが（一五三）
・ニヤニヤしてるこの男の気イ知れん思たら（一六〇）
・一層むかむかして来たとこい（一六〇）
・人がウヨウヨしてて（一八一）
・うとうとしながら聞いてて（一八五［2］）
・一人丈夫そうにぴんぴんしてる様子見たら（二〇一）

これらの例における「と」の挿入の可否については、おそらく判断が割れるものも存在するであろう。例えば、「コセコセとした字」「オドオドとした様子」など、とりわけ連体修飾の場合には、「と」の挿入を認める場合も出てくるかもしれない。もともとオノマトペに対する「と」の付加に関しては、ある程度の判断のゆれは見られるようである（例えば、田守・スコウラップ　一九九九、六八頁以下参照）。

以下は反復形以外のオトマトペを使った同種の動詞化タイプであるが、「と」はやはり挿入されないのが一般的であろう。

動詞型「［AッBリ］する」

・どう云う訳やにっこりしなさって（一七）

・びっくりしなさって（二八、三一、四四、四六、六三、六六）

・鹿がビックリして逃げますねん（九七、一一四、一二七、一七五、一七八）

・二人の気持シックリすることめったにのうて（一三七）

・ハッキリして来るにつれて（一八六、一九九）

・ゆっくりしてよ思てんけど（一九四）

動詞型「［ABCB］する」

・ちょっとどぎまぎして（十四、一六八）

・人がチラホラしてましたのんに（二七）（継続相）

・ヤキモキしなさって（一九五）

動詞型「［AンBリ］する」

・一日家にぼんやりしてまして（八、二四、一七九）

ここで挙げた最後の動詞型も、『卍（まんじ）』には必ずしも多いとは言えないが、「ニンマリする」「ほんのりした雰囲気」など、すぐに思い浮かぶような例も現実には存在する。

最後に、「する」がついて動詞化するが、「と」の付加については随意的と判断せざるを得ないような動詞型を挙げ

ておく。これは、［AッBリ］型のオノマトペから作られる動詞において観察される。

動詞型「［AッBリ］（と）する」

・うっとりとして（五四）
・ひっそりとした間口の狭い地味な構えなんです（六七）
・心からシックリとはしませなんだ（一〇五）
・あっさりした男違いますよって（一四六）

これらはオノマトペに「（と）する」を付加する動詞型であり、（「する」という動詞からの連想とは異なって）意味的には主語自体がある状態に変化することを表わす自動詞的意味内容を持つ。他方で、以下のような「となる」を付加させる一般的な自動詞的タイプもある（ここでは「と」は義務的）。

・ええ心持にぽうッとなるのんと違て（七八）
・どろんとなった瞳上げて（九一）

ここで使われているオノマトペは［A―ッ］型、［ABン］型であるが、「かっとなる」「かっかとなる」などを考えれば、挿入されるオノマトペの型は他にも拡がるであろう。またここまで結果副詞的用法としてきたオノマトペの中には、「ぼろぼろになる」などのように「になる」が続くものがあるが、これらもこの種の自動詞化タイプに入れ

ることができる。

さらに「させる」（関西弁では「さす」）を付加して使役動詞化（つまり他動詞化ということでもある）していると見做せるものには、以下のような例がある。

・ピクピクさす癖あって（一〇四）
・口の中にちゃにちゃさしながら（一九七）
・光子さんビックリさして（一四〇）
・その点ハッキリさしときたい（一五八）

ここで使われているオノマトペは［ＡＢＡＢ］型、［ＡッＢリ］型であるが、「どぎまぎさせる」などの例もあることから、一般的に見ればもう少しこれに使われるオノマトペも拡がってくるであろう。さらに「と」を付加させれば、「どきんとさせる」といったタイプも可能である。また以下のような「つく」が付加して動詞化する例もあるが、これは一般に否定的意味を持つとされる（泉　一九九〇、一三七頁、田守・スコウラップ　一九九九、五七頁参照）。

・眼エの前にチラついて（六六）

その他として、例えば次に示す「こんがらがる」の中には一般のオノマトペの形式を見い出せないが、動詞自体をオノマトペ的に表現しているようにも見える。

・何しろ事件があんまりこんがらがってて　（五）

三・五・二　オノマトペから作る形容動詞などの品詞

上記ですでに「結果副詞的」として紹介した例えば「びしょびしょに」「ぼろぼろに」などは、「びしょびしょだ」「ぼろぼろだ」というように形容動詞的に用いられる（田守・スコウラップ　一九九九、六三頁参照）。以下のものもそうした類のオノマトペである。

・うちもうペコペコやわ（二八）
・ずるずるべったりに焼餅喧嘩止めてしもて（一〇五）
・かんかんになって怒ってる云うのんで（一一〇）
・縁談滅茶々々にしょうとかかってるのんで（一三九）

他方、オノマトペが関係する形容詞は数が少ないと考えられているが（田守・スコウラップ　一九九九、同上）、以下のものは『卍（まんじ）』に現われるそうした少数の例である。

・如何にも上方好みのケバケバしい色彩のものらしい（一五）

オノマトペの名詞化の例は、例えば子供に対する「ワンワンが来るよ」などが典型的である（泉　一九九〇、一三五頁、田守・スコウラップ　一九九九、五九頁参照）。次に挙げる「ギザギザ」は明らかにそうした用例の一つである。名詞化したオノマトペの形については、「全て繰り返し形だ」（泉　一九九〇、一三六頁）という指摘もなされているが、それ以外にも、統語的位置から判断して名詞化と見られる例もある。オノマトペか本来の副詞かの判断において多少の困難を伴う程度副詞的な「ちょっと」（つまり、「ちょっと」は「ちと」から派生していると考えられるため）、陳述副詞的な「ようよう」等々も、次の例のような場合には名詞化していると考えられなくもない。

・金色のギザギザで輪郭が取ってある（三九）
・ちょっとの間も離れとないのんに（九三、一二四、一五三）
・ちょっとぐらい怒られたかて（一一三）
・ちょっとばかり痛いのん辛抱してくれませんか（一二四）
・ちょっとやそっとの不都合があったから云うと（一六三）
・ようようのことで止めててんもん（一七三）
・ぎゅうぎゅう云う目に逢わしなさった（一三八）

さらに複合名詞の構成要素や接頭辞の役目を果たしていると見做せるものについては、以下のようなものが『卍（まんじ）』には見出される。

・キチン屋（四七）
・ガリガリ屋（四七）
・光子さん腹ぼてになったんか（一〇七）
・すかっ貧の男（一一〇）
・すッ込んでや（一五四）

また多くのオノマトペは、以下のような「〜（と）した」という形で、名詞を修飾する連体詞としての機能を果たす。

・ちょっとした器具さいあったら（九二）
・町中のゴタゴタしたとこの方が（一〇一）

四　外来語

日本人が外来語を好む傾向と、日本語にオノマトペが非常に多いこととの間に何らかの関係があることは、泉（一九九〇、一四九頁）によって指摘されている。例えば、見知らぬ外国語を母語になぞらえて理解したりすることや、鳥の鳴き声など母語に対応する語がない音・声を母語になぞらえることの中に、二つの表現に対する共通の態度を見てとれる。実際表記においても、オノマトペは外来語同様、しばしば片仮名で書かれる。また商品名にしても「ザブ」

「ジャバ」「サッサ」「スキット」「サラリン」「ホッカイロ」「ドント」等々、何らかの形でオノマトペを取り入れながら、外来語の雰囲気をかもし出している商品名も多い（泉　同上、田守　二〇〇二、一九頁以下参照）。ただ関西女性に仮にオノマトペへの好みと外来語への好みの両方があるとしても、そこに何らかの特別の共通する心性を認めたりすることはむずかしい。しかし『卍（まんじ）』で用いられている以下に挙げるような外来語は、基本的には阪神間のある種上流階級の持つ洋風文化的色彩を色濃く担っていることは確かである。とりあえず外来語が指す概念を、幾つか意味論的に分類・整理して示すことにする（なお外来語のすぐ下の［　］内は、湯淺による注）。

（家屋・家具・食器等）

ピアノ　（六）、ダブルベッド（三一）、ベッド（三一、三二、八五）、スプリング（三一）、ガラス窓（三一、三三）、カーテン（三三）、シーツ（三三、三三、三四［3］、三五［2］、三六、九二）、シェード（四〇）、スタンド（四〇）、テーブル（四一、七八［2］）、ドーア（七七、一五七、一六四、一八〇）、グラス（七八）、コップ（九二）、テーブル（一五八、一六四、一六八、一七二、一七三）

（衣服・携帯品、食品等）

セル［服地の一種］（五〇）、絹セル（六二）、白セル（一〇四）、ネクタイ（八〇）、桜ん坊のジェリー（八二）、ハンカチ（八六［2］、一二四）、サンドイッチ（九八）、パンツ（一〇四）、ステッキ（一三一、一三九）、タオル（一五六）、ポケット（一五八）、タブレット（一七九）、ワンピース（一八一）、ヴォイル［薄地の織物］（一八三）、パラソル（一八三）

（上流階級的な趣味等）

モデル（九［4］、一〇［4］、一一［2］、一二［4］、一三［6］、二五、三七［4］、四八、五三、一一九、一三九）、ポーズ（九、三二、三五、五四）、デッサン（九）、モデル女（一一、三三［2］）、ラブレター（一八）、アトリエ（三七、五三）、レターペーパー（三八、三九、四三）、ペン字（三九、四一）、ペン（四〇、一二三、一七七）、ハート（四一［2］）、スペード（四一［2］）

（特定の人、呼称等）

プロフェッサア（七）、ハズさん（四二［2］、四三、五七［3］、五九［2］、六二、九四、九六）、ハズ（四四［3］、四五）、マダム・ジャルダン（四三）、マドモワゼル・ジャルダン（四三）、マダム（四三）、ヴァンパイア（四四）、マドモワゼル（五八）、ハウスワイフ（八〇）、ステッキ・ボーイ（一二九、一三一）、キリスト（一三四）

（都市的社会生活）

ビルディング（七）、円タク（九）、レストラン（一八）、タクシー（二二、九六、一八三）、ケーブル・カア（二七）、イルミネーション（二七）、スペアシート（七五）、コンクリ（八五）、大タク（九六）、カフェエ（一四一）、バス（一五七）

（国名、会社名等）

仏蘭西（ルビ:フランス）語（四一）、亜米利加（ルビ:アメリカ）、ギリシャ（一三四）、バイエル［製薬会社名］（一七九）

（自然）

チューリップ（三八）、プラタナス（四一、五七）、クローバー（四一［2］）

（主として都会的抽象的概念）

ヒステリー（六、二〇〇）、ハイカラ（三一）、イエス（四一）、ノー（四一）、パッション（四六、一九〇［2］、二〇〇［2］）、コンヴェンション（五四）、えらいシャンや云われて［ドイツ語のschön］（一二八）、プラトニック・ラヴ（一三〇［2］）、ヒント（一四四）、プライド（一四八［2］）、センチメンタルな声（一四九）

（近代的生活様式）

サイン（四三、一二四［2］）、ノック（一六四）

（物・形の名称）

オールドローズ［色彩名］（四一）、ハート型（三九［2］）、アルコール（九二）、ガラス（一九六）、赤インキ（二〇二）

以上、『卍（まんじ）』に出てくる外来語を幾つかの意味領域に分類してみたが、それによってわかることは、全般に外来語となって使われているものは、都会的な衣食住に関するものであり、しかも抽象的概念より、むしろ実体のあるものが多い。そしてこうしたどちらかと言えば即物的な外来語の連鎖からは、阪神間に居宅を持つ上流階級に属する女性の生活が、垣間見えてくる。話の内容はある意味では悲劇なのであろうが、むしろ阪神という、陽光が明るく射し、気候も温暖で、しかも港町神戸も近く外国人も決して少なくない地域の特性が、こうした右に述べたような外来語の響きによって一層際立つ。悲劇が悲劇に留まらず、どうしても喜劇に転化してしまうのは、こうした外来語（あるいは、すでに述べた大阪弁やオノマトペ）に現われる関西の言語や風土によるところも大きいであろう。そして『卍（まんじ）』の外来語を見る限りでも、外来語で表わされた舶来物の関西文化あるいは阪神間の文化への移入が、当然のことながらこうした上流文化に属するものから始まったのではないかと推測させる。

五　おわりに　――明るさと粘っこさの間――

本稿の（一）（『近代』九五号）では、「越境者の聞いた『大阪語』」という副題のもと、谷崎の『卍（まんじ）』で使われる大阪弁・関西弁を紹介・分類し、その音韻的文法的特徴を分析した。またこの（二）（本号）では「『大阪語』の中のオノマトペと外来語」という副題で、『卍（まんじ）』で多用されるオノマトペ―つまり、擬音語・擬態語―を形式や意味領域の面から分類・整理し、その特徴を見ると共に、他方で使用される外来語について、どういう意味領域のものが多いかを概観した。大阪弁について関西に移住して間もない谷崎は、大阪人・関西人の「声」に関心を持ち（これは新たな生活の場で現地の言葉がまず耳から入ることから考えれば、当然のことでもある）、東京弁などと

比較して、その「粘っこさ」を評価していた。他方で、大阪弁の持つ文法的特性に対しても強い関心を持ってはいたが、その関心の強さ故に、逆に関西女性に翻訳させた文章を推敲し書いた『卍（まんじ）』は、あまりに「文法的でありすぎ」（河盛　一九六七）、「表面的に大阪言葉の感じの強い露骨な大阪言葉」（河野　一九七六）になってしまった（本稿（一）参照）。実はこのような指摘は、代表的な大阪の作家織田作之助によっても、戦後間もない一九四七年（昭和二十二年）になされている。[15] 織田は当時『新生』に掲載した「大阪の可能性」の中で、『卍（まんじ）』成立の経緯にまで言及しながら、そこで用いられる大阪弁について次のように述べる。「大阪弁も女専の国文科を卒業した生粋の大阪の娘を二人まで助手に雇って、書いたものだけに、実に念入りに大阪弁の特徴を生かそうとしているし、ことに大阪の女の言葉の音楽的なリズムの美しさはかなり生かされていて、この作品を全部大阪弁で書こうとした作者の意図は成功している。」他方で、その大阪弁を「何か標準語の大阪弁」と呼び、「これは美化され、理想化された大阪弁であって、隅から隅まで大阪弁でありたいという努力が、かえって大阪弁のリアリティを失っているように思われる」とも述べている（以上、織田　一九七六、二六八頁以下）。この見解は先に示したような、後の河盛好蔵、河野多恵子らの評価の嚆矢となっているが、大阪弁を日頃使って生活している大阪人共通の認識とも言える。ここで織田自身は、『卍（まんじ）』で使われた大阪女性の言葉のリズム感を評価している。しかし本稿（一）でわれわれは、むしろ綿貫、柿内（夫）の発話をとらえ、大阪弁らしいリズム感やダイナミックな動きがないことを指摘した（（一）の一七六頁以下参照）。『卍（まんじ）』は語り手が女性であるため、女性の発話の再現のほうが多いが、もし男の発話の方にリズム感が足りないとすれば、それは翻訳者が関西の女性二人であったため、男性の言葉を流暢に大阪弁に翻訳できず、そのため谷崎の東京弁的あるいは標準語的な口調が前面に出てきたためという理由も考えられよう。織田の言う「大阪弁のリアリティ」を再現するためには、決してステレオタイプの大阪弁を話さない生活者の言葉のリ

ズムをも包摂する必要があろうが、織田の「大阪弁ほど文章に書きにくい言葉はない」（織田　一九七六、二六六頁）という告白を待つまでもなく、関西への移住間もない谷崎にとって―たとえ彼が言葉への鋭敏な感受性を持ちうるとは言え―そのようなことはむずかしかったと言える。

本稿（二）で論じた『卍（まんじ）』の中のオノマトペについては、特に大阪弁独自のオトマトペがあるとは言えない。しかし一般にオノマトペの中には長音や撥音「ん」が多く用いられており、それは大阪弁の持つ特徴と共通している。また『卍（まんじ）』でも頻出する反復形のオノマトペは、現代日本語で最も多いオノマトペのタイプである。それと同時に、奈良・平安時代から用いられていたものでもあり、その意味で古来から関西では頻繁に用いられていたと見てよい。促音を含むオノマトペについては、鎌倉時代になってから使用されるようになったため関東起源の可能性もあるが、基本的にオノマトペの持つ生き生きとした描写力は、関西弁の特徴を決して阻害する表現手段とはならないであろう。他方、外来語はそれが表わす上流階級の生活様式を通して、阪神間の明るい舶来的文化的雰囲気をかもし出す一因となっている。

本稿（一）（二）における谷崎の小説『卍（まんじ）』の文体分析―それは必ずしも言葉の全体像を対象としたものではないにしろ―を通して、われわれは主に次のことに注目した。それは、谷崎の、大阪女性の「声」の「粘っこさ」への評価、一モーラの単語の二モーラ化・終助詞などに多用されるnという子音・無助詞的構文を使ったスピード感のある発話・様々な終助詞を使った微妙なニュアンスの伝達等々、大阪弁の持つ音韻的文法的諸特徴への谷崎の関心の高さ、さらには反復形を中心としたオノマトペの多用や関西（とりわけ『卍（まんじ）』の舞台ともなっている阪神文化圏）の持つ洋風生活様式を表わす外来語の使用等々である。[16] そして「越境者」である谷崎の、こうした声や音に関わる関心が、柿内園子の「先生」への語りともつながっていく。従って、柿内園子の語り口調が、関西の人形浄

瑠璃における「語り」と重なるという佐伯（一九九三）の指摘もうなずける。関西を舞台にした（ある意味で、言葉の上ではより洗練された）『蓼食う虫』や『細雪』との違いも、こうした『卍（まんじ）』における「語り」の手法に見るべきであろう。最後にその佐伯の言葉を引用し、本稿のまとめとしておきたい。

大阪女による大阪弁の、押しつけがましいばかりの一人語りが、いかに「ネバリ」強く、「ガッシリ」と「前後一貫した組み立て」をもって、まかり通ってゆくことか。大阪の女性という仮面が、そしてまた「人形」が、谷崎によって存分に利用されていると感嘆せずにはいられない。どうやら『卍』は、谷崎流の女義太夫、一人語りによる、「無作法」を恐れぬ、エロチックな人形なのではあるまいか。その筋立ての錯綜ぶりといい、粘っこく腰の強い人間関係の絡みあいといい、同時代はもちろんわが国の近代小説に、その類縁を見出すことの難しい作品であって、語りを主体とする日本の演劇伝統にこそ、しっくりとはまりこむものと思われてならぬのである。（佐伯　一九九三、二五六頁以下）

（了）

【注】

(12) 本稿は（一）（二）と内容的には連続しているが、副題はそれぞれの内容がわかるように異なる題を付けておいた。

(13) 谷崎は関東大震災後の翌年にあたる一九二三年（大正十三年）三月に『痴人の愛』を『大阪朝日新聞』に発表している。従って当時すでに関西には転居しており、その五年後、『改造』に『卍（まんじ）』の発表を開始する（以上、「アルバム」参照）。こうした谷崎の転居の状況を考えれば、内容は別にしても、『痴人の愛』の語り口に関西の言語的雰囲気・慣用が全く影響を与

えていないとは言えないかもしれない。

(14) 例えば仁田（二〇〇二）では、オノマトペは通常の副詞と文法的には全く区別されずに分析されている。そこでは、「結果の副詞―『上着がボロボロに破れた』―と様態の副詞―『上着がビリッと破れた』――では、限定対象として取り出される局面が異なっている」（仁田　二〇〇二、三四頁）のように、オノマトペが結果の副詞、様態の副詞の代表例として挙げられているケースさえある。

(15) 織田が「大阪の可能性」の中で谷崎の『卍（まんじ）』に言及していることは、山澤孝至氏のご教示により知ることができた。

(16) 谷崎は、「私の見た大阪及び大阪人」の中で、「私の場合には、幸いにして此方の気候と食物とが最初から東京よりも自分の体質や嗜好に合っていた」（全集版、第二〇巻、三五一頁、現代仮名遣い等に変更）と述べると共に、夙川から御影に至る沿線を「関西に於ける最もハイカラな区域」（同上、三五七頁）と呼び、「阪神沿道の暖国的風景」（同上）として、阪神間の上流婦人の和服の派手さやきらびやかな洋装についても描写している。谷崎の評価としては、「ケバケバしい色彩」とか、「きらびやかなことは無類だけれども、それが余りに繊弱に過ぎ、優美に過ぎて」といった言葉でもわかるように、どちらかと言えば否定的である。他方で、谷崎が新築した岡本梅ケ谷の「理想通りの間取り」の家を見た野村尚吾は、「和・中・洋が混然としていて、実に奇妙な造りである」と述べ、それを捉えて佐伯（一九九三）は、「一体、生活者としての谷崎がどこまで、上質の美的様式派たり得たかについては、かなり疑問の余地がのこるだろう」と述べている（以上、佐伯　一九九三、一三二頁以下）。角度を変えて言えば、関西女性の服装のセンスへの低い評価とは裏腹に、谷崎自身の美的感覚は、かなり関西的趣味と一致していたのかもしれない。

【参考文献】

泉邦寿（一九九〇［一九七六・初版の新装版］）「擬声語・擬態語の特質」（鈴木編『日本語講座4　日本語の語彙と表現』大修館書店　一〇五―一五一頁）

ウォーフ、B・L（J・B・キャロル編、池上嘉彦訳）（一九七八）『言語・思考・現実―ウォーフ言語論選集』　弘文堂（原著の選集は一九五六）
大坪併治（一九八九）『擬声語の研究』　明治書院
織田作之助（一九七六）『定本織田作之助全集　第八巻』　文泉堂出版
筧壽雄（二〇〇一）「〝変身〟するオノマトペ」（『言語』八月号、二八―三六頁　所収）
笠原伸夫（一九八九）『新潮日本文学アルバム7　谷崎潤一郎』　第六刷　新潮社（「アルバム」と略記）
角岡賢一（一九九三）「日本語の『擬似オノマトペ』―日本語と中国語の接点―」（筧・田守編『オノマトピア　擬音・擬態語の楽園』勁草書房　一四五―一一八頁所収）
河盛好蔵（一九六七）「谷崎文学と関西」（『谷崎潤一郎全集　月報十一』　中央公論社　所収）
金田一春彦（一九七八）「擬音語・擬態語概説」（浅野編『擬音語・擬態語辞典』角川書店、三―二五頁）
工藤浩（二〇〇〇）「副詞と文の陳述的なタイプ」（森山・仁田・工藤『日本語の文法3　モダリティ』岩波書店　一六一―二三四頁所収）
河野多恵子（一九七六）『谷崎文学と肯定の欲望』　文芸春秋
佐伯彰一（一九九三）『物語芸術論　谷崎・芥川・三島』　中公文庫　（講談社版の初出は一九七九）
谷崎潤一郎（二〇〇三）『卍（まんじ）』　第九刷　新潮文庫
――（一九三二）「私の見た大阪及び大阪人」（『谷崎潤一郎全集　第二十巻』中央公論社　一九八二年　所収）
田守育啓（一九九三a）「日本語オノマトペの音韻形態」（筧・田守編『オノマトピア　擬音・擬態語の楽園』一―一五頁所収）
――（一九九三b）「日本語オノマトペの統語範疇」（筧・田守編『オノマトピア　擬音・擬態語の楽園』一七―七五頁所収）
――（二〇〇二）『〈もっと知りたい！日本語〉　オノマトペ　擬音・擬態語をたのしむ』　岩波書店
田守育啓・ローレンス・スコウラップ（一九九九）『オノマトペ―形態と意味―』　くろしお出版

仁田義雄（二〇〇二）『新日本語文法選書3　副詞的表現の諸相』　くろしお出版
前田勇（一九四九）『大阪辯の研究』　朝日新聞社
――（一九六一）『大阪弁入門』　朝日新聞社
山口仲美（二〇〇二）『犬は「びよ」と鳴いていた　日本語は擬音語・擬態語が面白い』　光文社新書

［付記］本研究は文部科学省ハイテク・リサーチ・センター整備事業（平成一六年度～平成二〇年度）によるプロジェクト「関西圏の人間文化についての総合的研究―文化形成のモチベーション―」の研究成果の一部である。